

申命記 6章 1-9節

ヘブライ人への手紙 7章 22-28節

マルコによる福音書 12章 28-34節

B年の「聖餐式聖書日課」の福音書は、「マルコによる福音書」ですが、11章は丸ごと省略されています。そこではイエス様と一行のエルサレム入場（マルコ 11:1-11）、そして、イエス様がいちじくの木を呪う話（マルコ 11:12-14）、イエス様が神殿から商人を追い出す話（マルコ 11:15-19）、いちじくの木による教訓の話（マルコ 11:20-26）、そしてイエス様と祭司長、律法学者、長老たちとの権威についての問答（マルコ 11:27-33）がありました。どれも大切なお話ですが、登場人物として注目すると大切なことがわかります。

祭司長、律法学者、長老たちは、当時のユダヤ社会における、宗教的・社会的権威者の代表であり、またイエス様の敵対者たちでした。重要な役職の方々が並んで登場しているということです。12章に入ると、イエス様のぶどう園と農夫のたとえ（マルコ 12:1-12）を挟んで、また問答が三つ続きます。本日の福音書はその三つ目に位置していますが、ぶどう園と農夫のたとえ話と、三つの問答のうち最初の二つは、B年の「聖餐式聖書日課」では省略されています。一つ目（マルコ 12:13-17）では、人々がファリサイ派やヘロデ派の人を使わして、有名な皇帝への税金の是非について質問させます。この「人々」が誰であるか特定できません（だから「人々」と訳されているのです）。注目すべきは、ファリサイ派とヘロデ派という本来あまり仲の良くない二派が、イエス様に質問に来たということです。二つ目（マルコ 12:18-27）では、復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエス様に復活について質問します。これで派閥が三つそろいました（聖書には登場しませんが、エッセネ派という派閥もありました）。

ここまでで役職としての敵対者、派閥としての敵対者がほとんどすべて登場し、最後に三つ目（マルコ 12:28-34）となるのが本日の福音書の箇所です。そこは、『新共同訳聖書』の小見出しでは「最も重要な掟」とあります。この小見出しには二つの意味があります。物語の中で話題となっている、律法にとって「最も重要な掟」という意味と、「マルコによる福音書」全体が示そうとする、イエス様の「最も重要な掟」、教えという意味です。本日は、この福音書を中心に学びますが、ことに前の二つの問答を含めて学んでいきたいと思えます。これらの流れ、本日の箇所が三つ目であることに重要な意味があるからです。

三つのお話の舞台はエルサレムです。直前では、ファリサイ派やヘロデ派の人々が、「皇帝への税金」について、「ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているのでしょうか、適っていないのでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」（マルコ 12:14）と、イエス様に意地悪い質問を

していました。肯定的に答えても、否定的に答えても、批判できる質問であり、いわゆる言質を取ることができる質問でした。イエス様は、実際にあるデナリオン銀貨を題材として、有名な発言「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」（マルコ 12：17）と答えることによって、見事に答えています。

次に、サドカイ派の人々が、「復活について」について、これも極めて意地の悪い質問をします。「復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです」（マルコ 12：23）という問いです。これは復活を実際に死んだ人がこの世界に生き返ることと考えた場合、現代でも起こりうる質問です。イエス様は、「死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ」（マルコ 12：25）と答えています。この答えは、あまり有名ではありませんが、あらためて見直してみますと、大切なことを語っています。イエス様の理解によれば、復活とは、天使のようになることだからです。ここではそれ以上に入りません。

11章27節以下、役職としての「祭司長、律法学者、長老たち」、ここでの派閥としての「ファリサイ派、ヘロデ派、サドカイ派」、それらの人々が、イエス様に悪意を持った質問を投げかけた後、本日の一人の律法学者が登場して、イエス様に質問をします。この流れは、明らかに、再び敵対者が悪意ある質問をするのであろうと、読者に予期させる構造を持っているといえます。しかし、実際には、その期待は裏切られます。それは、敵対者の一部である登場人物が、イエス様の最も大切な教えを語るという結果になっているからです。この一連のお話の流れには、このような逆説的構造によって、読者に最も大切な教えを示すという、語り的手法があるのです。

さて、本日のお話は、「彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた」（マルコ 12：28）という導入で始まります。質問する一人の律法学者は、それまでの議論を聞いていたのです。それは敵対者たちが、イエス様を陥れようとしたが失敗したことを目撃していたことを意味します。彼の質問は、「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」（マルコ 12：28）というものでした。これは単純な質問ですが、律法に関して良く問われる質問でもあったようです。

イエス様の答えは、「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない」（マルコ 12：29-31）でした。要約して言えば、第一に「神を愛すること」、第二に「隣人を愛すること」でした。これは特別な教えではなく、ユダヤ教徒ならば、誰でも知っている基本の教えです。イエス様と同時代のラビでも、そう答えたかもしれませんし、読者も知っている答えであったかもしれません。律法の専門家に、律法の基本中の基本の教えを答えたのですから、ここではイエス様の方が、少し意地悪です。しかし、いじわるという以上に、このような会話は、1

0章17節から22節にあるお話を思い出させます。そこでは、「永遠の命」について質問した人に、イエス様が、十戒の一部のような基本的なことを答えます。すると質問した人は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と答えていました。ここでもそのようなことが予想されます。しかし、その律法学者は、イエス様の答えに、守ってきましたとか、知っていますとか答えるのではなく、また怒ったりすることもなく、「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています」と語り、イエス様の意見に、賛同したのでした。すると、イエス様は、「イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、『あなたは、神の国から遠くない』と言われ」、その人の答えを高く評価したのでした。

イエス様が、この律法学者の答えを高く評価したといえる根拠は、「神の国から遠くない」という微妙なニュアンスを持つ言葉にあります。これは、物語世界の中では、今生きている人に対しては最大限の評価です。なぜならば、イエス様は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ1:14）」と語り宣教活動をされたからです。「神の国（支配）」はまだ到来していませんが、信じることを通してそれが近いと実感するべき事柄です。それゆえに、その「神の国（支配）」に遠くないということは、もう近くにいるということです。言い換えれば、信仰を完成したわけではないが、それに近いということに他なりません。彼の答えは、イエス様のお考えに即した、答えだったのです。つまり、イエス様のもっとも重要な教えは、この律法学者の答えにあったということです。

それでは、イエス様の答えと、その律法学者の語ったことと、何が違うのでしょうか。イエス様は、第一に「神を愛すること」、第二に「隣人を愛すること」と、順番を付けて答えました。しかし、律法学者は、『「神を愛すること」と「隣人を愛すること」』とそれら二つを、一つのものとして答えたのでした。そこに違いがあります。つまり、「神を愛すること」と「隣人を愛すること」この二つを一つのこととして考えなさいということです。またこの二つは、分けて考えてはいけない、実行するうえで、それらの比率を考えてもいけないということです。

『「神を愛すること」と「隣人を愛すること」』と、それら二つを、一つのものとして考え、実行する。この教えは、単純ですが、非常に深い内容を持っています。それでは、なぜ、神を愛するだけでは、なぜいけないのでしょうか。それは、神を愛するだけでは、隣人を愛さない場合があるからです。逆に、隣人を愛するだけでは、なぜいけないのでしょうか。それは、神様という大切な基準がないと、自分の行為が、本当に愛であるか分からないからです。それでは、その二つのバランスを考えることでは、なぜいけないのでしょうか。バランスをとるといふ行為が、人間の判断基準に依存し、愛を限定してしまうからです。

イエス様は、この愛を実践されました。その働きが福音書の各お話の中で示されたのですが、物語全体としてのこの愛の実践の結果は、十字架の死でした。しかし、それが、主なる神様のみ心にかなうことであり、そこに本当の救いがあることが、イエス様の復活によって証しされたのです。それゆえに、イエス様の復活を信じることは、単に永遠の命を信じるだけではなく、この地上でこのもっとも重要な掟、そこに示された愛を信じ、実践することにつながるのです。

それでは、この愛の実践はどこで行うべきでしょうか。その問いへの正しい答えは、いっどこにおいてでも実践すべきであるということになると思います。しかし、基本は、教会においてです。主なる神様によって呼び集められ、『聖書』に基づいてこの教えを知っている教会、その教会の中で実践されなければなりません。イエス様を中心とした集まりの中で、この愛が実践されていなければ、世界では何も始まらないからです。

それでは、教会がこの「マルコによる福音書」にあるイエス様の教えを、大切なこととして保持し、実践に努力してきたのかというと、決してそうではなかったと思います。『聖書』が正典となって以降、「マルコによる福音書」は、「マタイによる福音書」の要約版として認識されました。そのマタイを見ると、ここでは質問した律法学者にイエス様が答えるだけで終わっています（マタイ 22:34-40）。「ルカによる福音書」にも同じ物語がありますが、ここでは律法学者がこのマルコの箇所と同じような答えをしますが、同時に彼は「**では、わたしの隣人とはだれですか**」と全体を打ち消すような質問を返しています（10:25-37）。だから有名な良きサマリア人の話につながるのですが、それらは、このイエス様の最も大切な教えは、様々な教えの中に埋没していったことを示しています。言い換えれば、この教えは、世界を照らす光として大切なものであったと同時に、すぐに消えてしまう小さな灯のようなものであったといえるのです。しかし、だからこそ21世紀末になっても、わたしたちがこの教えをあらためて心に刻み、教会から実践することが大切なのです。

もうすぐコロナ禍も終わると思います（そう期待しています）。コロナ禍で、示されたこととは、コロナ禍が始まる以前の教会の在り方に単に戻ることはありません。むしろ、コロナ禍であったからこそ示された、今まで気が付かなかった何か、足りなかった何かを実践することです。それはわたしたちの東京聖三一教会だけではなく、東京教区、おそらく聖公会を超えて、全世界の教会で同じだと思います。そのような歩みの基となるのが、本日のイエス様の最も重要な掟です。そのことを忘れないようにしたいと思います。

わたしたちの教会は、東京教区の中では歴史もあり、集まる皆さんの賜物も豊かであり、敷地・建物にも恵まれています。そして、そうであるがゆえに、わたしたちの教会固有の課題もあります。それらわたしたちの教会固有の事柄を考えると、本日のイエス様の最も重要な掟を忘れないようにしたいと思います。そして、そのようにして歩むとき、わたしたちは、わたしたちの教会を通じて、主なる神様にふさわしい実を、結ぶことができるのだと思います。